



愛宕山東京放送局(1927年ころ)



探り式鉱石受信機



信託協会会長 米山梅吉の講演録

米山梅吉記念館

館報

春号

2025 Vol.45

1864年、英国の科学者マクスウェルが電気と磁気が作り出す場(電界と磁界)が相互に作用して進行方向に対して直角に振動する波を作り、高速で移動するという理論を打ち立て、4つの方程式にまとめた。この理論によって電磁波の存在が予言された。1887年、ドイツのハインリッヒ・ヘルツの実験によって電波が存在することが実証され、実用化が進められた。ヘルツの実験が発表されたころ、文明開化を進めていた日本は、長岡半太郎がヘルツの実験を追試し、無線電信の開発を進めた。

カナダの電気技術者レジナルド・フェッセンデンが、距離約1マイルでの、音声の送受信に成功。1900年、ラジオが世界に初めて登場した。彼はその後もラジオの改良に取り組んだ。それ以降、世界各地で実験、試験的なラジオ放送が行なわれ、アメリカ・ペンシルベニア州ピッツバーグのKDKA局が、1920年11月2日に世界初の公共放送を行なったと言われている。

日本にも世界のラジオ放送のニュースが伝わり、ラジオ放送の実験があちこちで行なわれた。1923年(大正12年)に関東大震災が発生し、情報伝達メディアとしてラジオの必要性が認識されるようになった。そして1925(大正14)年3月22日午前9時30分、日本初のラジオ放送が社団法人東京放送局(JOAK:現NHK東京放送局)によって発信された。この時使われていたラジオは「探り式鉱石受信機」だった。1926年4月、米山は愛宕山から「信託の話」を放送している。(本文3ページ参照)

日本初のラジオ放送から100年。今、情報の在り方が大きく変化している。

秋季例祭

報告

■ 日時／2024年9月21日(土)午後2時

■ 会場／米山梅吉記念館ホール

開会前墓参

講演

【演題】米山梅吉翁が信託を創業して100年

～翁の信託業に対する熱い思いと今も受け継がれる「奉仕と開拓」の思想とは～

【講師】橋本憲明氏（東京日本橋東RC 三井住友信託銀行日本橋営業部長）

日本のロータリークラブの父として、また奉仕の人として知られる米山梅吉翁について、実業界における活躍についてはあまり知られていない。

本講演においては、今年が日本初の本格的な信託会社が誕生して100年という大きな節目にあたり、創業者である米山梅吉翁の偉業について少しでも多くの方に知って頂きたい、併せて梅吉翁の創業時の思想や遺志が100年経ってどのように受け継がれてきたのかについて紹介したい。

～梅吉翁が世に残した4つの功績の共通の精神～

数々の功績を残した梅吉翁の経歴については今更私に説明するまでもないが、その中で100年近く経った現在もなお残っている組織がある。一つは言うまでもなくロータリークラブ、二つ目が今回のテーマである信託業（信託銀行）、それに実業界引退後に創った三井報恩会（三井グループの奉仕団体）と私費を投じて創立した緑岡小学校（現在の青山学院初等部）を加えた4つである。

一世紀近くも続く4つの組織には共通点がある。「奉仕の精神」である。この中で唯一の事業会社である信託銀行においては、「奉仕」に加えて「開拓」の精神が刻まれている。まずはあまり知られていない（本記念館でもコーナーが小さい）実業界における梅吉翁の活躍について触れてみたい。

～創業時の時代背景（大正デモクラシー）～

梅吉翁が信託を創業したのが大正末期の1924年であるが、その時代の背景を振り返ってみたい。大正時代



橋本部長講演

は、第一次世界大戦の特需による好景気もあり、日本経済が大きく発展、自由民権運動が活発化、西洋文化が普及する等、大きな変革の時代であった（大正デモクラシー）。一方で、法整備が追いつかず秩序が乱れ犯罪が増えるなど世の中が混乱していた時代でもあった。

かかる中で、貧富の差が生まれ成金が増える一方で犯罪も増加、財産管理の必要性が問われることになる。当時は質屋・金融業者など零細な信託会社が幾つも存在したようだが、日本では根付かず機能しなかった。法律が整備されていなかったこと、そして信用力のある信託会社が存在しなかったからである。そこで立ち上がったのが梅吉翁である。

～信託設立経緯～

若い頃から勉強家で志が高かった梅吉翁は、29歳で三井銀行に就職し、同期の池田成彬氏（後の日銀総裁）と共に銀行の発展を牽引し42歳で役員に就任。その才能と留学経験が認められ政府の欧米視察の特派員メンバーにも選ばれ、その際に社会奉仕活動を行うロータリークラブの理念と財産管理を担う信託会社の存在を知り強く共鳴したという。帰国後の1920年に福島喜三次氏とともに東京ロータリークラブを立ち上げ（初代会長）、その2年後に信託法が制定されたことを受けて信託法に基づく初めての信託会社設立の準備に専念すべく三井銀行の取締役を辞職した。ところが大蔵省に設立申請を出した後、関東大震災が起こり東京・神奈川一帯が焼け野原になり計画は一気に頓挫した。しかし梅吉翁は決して

めげなかった。世の中が新しいことができないという風潮の中、梅吉翁は親も失い土地も失い路頭に迷う子供達の悲惨な姿や実状を目の当たりにして「こういう時期だからこそ信託会社が必要」と財界各方面に精力的に働きかけ、1924年4月に三井信託会社の創業を実現したのである。設立発起人や出資者には、三井家や三井財閥系企業にとどまらず、住友や三菱、安田等の他財閥や渋沢同族会社等、当時の名だたる財界の有力者が名を連ねている。結果的に三井の名を冠したが、梅吉翁が目指したのは一企業グループにとどまらず日本経済全体を基盤とした大日本信託会社だったことが窺われる。

こうして、三井合名の団琢磨理事長をはじめ多くの財界人の協力支援のもと、新たに施行された信託法・信託業法に基づく日本初の信託会社、三井信託会社が設立された。設立趣意書では「事業の範囲・機能が異なり長短の別がある」「各々固有の機能を発揮すべき」と銀行とは独立した信託機能の存在意義を語り、「社会や時勢の要求から日本経済の発展に貢献する」と宣言した。

～社内外への様々なメッセージとエピソード～

信託は、委託者の財産を預かり(受託)、目的に応じて信託財産を管理・運用・処分を行い、その利益を受益者に還元する仕組み。名義まで替えて託されるわけだから、一般の信用・信頼ではならず、最上位レベルの「信じて託される」存在でなくてはならない。その為にも、法律や会社の信用力に加えて、社員の教育に力を注ぎ信託マンとしての魂を注入した。新入社員には「KEEP YOUR NAME CLEAN(汝の名を汚すなかれ)」と刻印された名刺入れを入社祝いに配布した。

梅吉翁に対する追憶録が幾つか残っており、その中から梅吉翁が残したとされるメッセージの一部を紹介しよう。

「信託業はロータリーの奉仕の精神を実現できる最適な事業」

「預けた人のために預けたものを管理運用して利益を還元するのだからまさしく奉仕」

「信託会社は営利企業ではあるが、サービス(奉仕)を主眼とせねばならぬ」

「信託マンたる者、単にお金を預かって運用するのではなく、委託目的実現を第一とすること。そのためには奉仕の精神がなければならず、常にお客の立場に立って新分野に仕事を切り拓くべき」

残されている言葉の多くが「奉仕」に関わるものであり、「とても民間企業の社長の言葉とは思えない」との皮肉めいたコメントも残っているほどである。

～その後の信託業の普及と発展～

出資者として参画していた各財閥も三井信託の成功を目の当たりにし、住友、安田、三菱の各財閥も後を追うように次々と独自の信託会社を設立した。梅吉翁は信託協会の初代会長に任命され、ラジオ放送が始まって間もない頃に「信託の話」をラジオ講座でも講演した。

「法律と関連して経済問題を処理するにあたり我々の顧問となり良き友となるべきものが信託」、「信託とは言わば各人の財産の安全地帯をなすべきものであり、今日の経済界になくってはならぬ大切な機関」、「富んで財産を持っているというばかりが偉いと褒めることはできない。その措置を立派にできる人こそが偉い(ソクラテスの言葉を引用)」ラジオから流れる梅吉翁のメッセージは、当時世間では殆ど知られていなかった信託業の普及活動を強く牽引した。



米山梅吉が講演した「信託の話」

その後の信託会社(信託銀行)は、豊かさを求める時代の中で移り変わる社会課題の解決に貢献しながら日本経済発展とともに順調に発展・拡大した。しかしながら信託銀行の存亡を揺るがす大きな転機・危機が訪れた。1990年代のバブル崩壊と金融危機、それに伴う金融再編だ。私が入社したバブル期は大手の銀行(都市銀、長信銀、信託銀)は23行もあり、信託銀行も7つあった。それが金融再編、失われた30年を経て、現在は5つの金融グループに再編されている。この中で唯一の信託専門の金融グループが三井住友トラストグループである。つまり、梅吉翁が信託を創業して100年、形や名称は変わっても、「信託」にこだわり続け大信託会社構想を提唱した梅吉翁の志や想いはしっかりと受け継がれてきたわけである。

～100周年事業～

三井住友トラストグループでは、三井信託100年、翌年住友信託100年ということもあり、2年間(2024～2025

年度)に亘りグループ全体で100周年事業を展開中である。ブランドスローガンは「託された未来をひらく」。全店でロビー展を実施、静岡支店や沼津支店では米山梅吉展も開催した。その中で私が所属する日本橋営業部は旧三井信託の本店、言わば信託発祥の地である。日本橋の象徴とも言える三井本館という歴史的建造物(重要文化財)内にあり、梅吉翁が10年間の社長業のうち後半の5年間執務をしていた旧社長室(現在は部長室)が当時のまま現存している。公募でワーキンググループのメンバーを募り、東洋一の大金庫の案内や創業者の梅吉翁に光を当てる活動を「奉仕」の心をもって精力的に行なっている。



以前所属していたクラブの三井本館見学会

本記念館に寄贈し展示されていた梅吉翁愛用の机・椅子そして「U.Y」のイニシャル付の個人用金庫も記念館側のご厚意で里帰りさせて頂き、今では見学会の目玉の一つとなっている。(2025年3月記念館に返却済)多種多様な見学会やイベントをほぼ毎日のように開催しているが、ロータリーの各クラブの皆さんも全国各地から梅吉翁の奉仕の魂が宿ったこの三井本館へ来訪頂いている。本活動について各メディアでも色々と紹介頂いており大変ありがたい話である。



メディアで紹介された活動の様子

我々は続ける。少しでも多くの方に梅吉翁のこと、そして翁が成し遂げた偉大なる功績について知ってもらうために。(講演では、ワーキンググループのメンバーが自作で撮影編集した動画を紹介)



動画作成風景

～最後に～

私が新入社員時代、横浜の支店で個人渉外として担当させて頂いた林賢材さん(三井信託一期生で6代目社長、当時91歳)から最初のご挨拶時にかけての言葉が今でも鮮明に残っている。「いいか橋本君、信託は銀行とは違うんだからね」

今年5月に亡くなられた田辺和夫さん(融資企画部勤務時代の上司で後の中央三井信託銀行社長)は住友信託銀行との経営統合の記者会見で信託専業に対する信念を貫くコメントをされた。「信託銀行は信託を主業とすべきである。従って再編は信託銀行同士であるべき」

統合後の三井住友信託銀行の行動規範には「奉仕開拓」が刻まれている。梅吉翁の想いを脈々と受け継いできて頂いた先輩方に感謝の気持ちが止まない。梅吉翁が信託を創業したのが56歳。奇しくも100周年を同じ歳で迎えることとなった私は新たに決意し誓った。偉大なる梅吉翁の生まれ変わりのつもりで(地位も業績も全然違い大変おこがましいが)、梅吉翁や諸先輩方の信託業に対する想いやこだわりについて、グループ全体、世間・社会全体に拡げ、そして次の100年を担う若い世代に確りと伝承していく。

(参考文献)

- 「米山梅吉伝(創意と奉仕の一生)」 「月刊日本橋」
- 「点描 米山梅吉」 「三友新聞」
- 「信託の話(大正15年ラジオ放送)」
- 「三井本館記念誌」
- 「三井銀行80年史」
- 「三井信託銀行50年史」

一般財団法人三井報恩会

設立90周年に当たって

一般財団法人三井報恩会 専務理事 弘中 聡氏



記念式典で挨拶する飯島理事長

1934年(昭和9年)に設立され、米山梅吉翁が初代の理事長を務められた一般財団法人「三井報恩会」が昨年2024年に設立から90年という節目の年を迎えました。

三井報恩会は、「社会の幸福と利益の追求及び文化の向上に貢献する事業を助成する」ことを目的とし、三井財閥の本社であった三井合名会社による3,000万円の寄付によって設立されました。当時の3,000万円は三井合名会社の2年分の所得に相当する金額で、現在の貨幣価値で数千億円に匹敵します。

三井報恩会はこの莫大な基金を活用し、設立から10年間で約3,900の助成事業を実施しましたが、その中に東北地方への農業振興事業があり、農村経済復興モデル農村のひとつとして、1935年(昭和10年)に岩手県彦部村(現在の紫波町彦部地区)を指定(期間:5年間)しました。

稲作だけに頼らない農村経営確立の為、当時の彦部村の年間予算を上回る多額の資金援助のもと、畜産振興策として、ニュージーランドやオーストラリアから輸入した綿羊を使ったホームスパン(手織りの毛織物)の生産、北海道から導入した乳牛による乳製品の製造が行われました。また、台所改善や農業託児所の設

置による生活改善事業など、金銭だけでなく多岐にわたる指導や支援が行われ、地域経済は改善し、彦部村は岩手県内の農村の模範とされたそうです。

米山理事長は、ハンセン病施設などの助成先を訪れる際に、ポケットマネーで手土産を持参されることがあったそうですが、当時彦部村を訪問された際にも、理事長自らポケットマネーで村の児童全員に一箱ずつビスケットを配られたそうで、「どの子どもたちもビスケットなど普段食べることはなく、歓喜した」(出典『三井報恩会と岩手県彦部村』)と暖かい人柄が窺えるエピソードも残っています。

戦前行われたこの彦部村への助成・支援に対しては、2014年に「この事業を正しく後世に伝えたい」という地域の皆様の活動により、彦部公民館敷地内に記念碑を建立していただいております。そして今でも紫波町彦部地区の皆様には「彦部地区の礎を築いた」とご評価をいただいております。設立90周年であった昨年2024年11月に、飯島理事長(三井物産特別顧問)他にて、紫波町彦部地区を訪問し、ゆかりの地を巡るとともに、地域の皆様との交流を図る機会をもつことができました。



綿羊事業地だった地元の旧家を訪問

訪問の際には、彦部地区の皆様による盛大な歓迎会の場をご用意いただき、大変楽しく、和やかなひと時を過ごしました。飯島理事長から冒頭挨拶で、「今回の訪問は、過去の三井報恩会の歩みを振り返り、また三井報恩会事業記念碑建立から10年という節目に紫波町彦部地区の皆さんとの絆を深め、未来に繋げていくための大事な機会です。」また「現代における三井グループ各社も、三井報恩会設立時の理念をそのまま引き継ぎ、報恩会での活動に留まらず、個別にも様々な分野において社会貢献事業を継続して展開しております。」と地元の皆様へお伝えし、これに対して「三井報恩会と特定振興村彦部村を考える会」会長の長澤様から、「冷害と経済恐慌に苦しむ我々を救ってくれたのが三井報恩会です。資金面だけではなく、輸入羊による綿羊事業や酪農事業の推進、指導員の派遣など具体的な産業振興施策を示し、古老は今も当時の思い出を語るほど。子どもたちにも歴史と

感謝の思いを伝えていきたいです。」との言葉をいただきました。長澤会長からは引き続き、残っている記録や写真等を交え、当時の様子から今に至る経緯などお話いただき、飯島理事長から改めて、「絆と記憶を継承し、再び交流が結ばれたことはとても嬉しく、地域の皆様に感謝申し上げます。本日の視察を通じて三井報恩会がこの地域で果たした役割を再認識し、これからも社会貢献を続けていきます。」と謝意を述べました。

90年前に、社会の福利増進並びに文化の向上発展に貢献するという理念をもって設立された三井報恩会は、戦後の財閥解体といった大きな世の中の変化も経ながら、1983年から三井グループ各社が中心となって運営する社会貢献事業組織として現在に至っております。

現在は①三井高維(たかすみ)氏が、海外勤務者の子女教育のため私邸を開放し開設した「学校法人啓明学園」②三井家10代当主である三井高棟(たかみね)氏が開設した「学校法人北泉学園(若葉会幼稚園)」③「社会福祉法人三井記念病院」④「学校法人日本聾唖学校」に対する寄付を中心とした支援事業を継続しています。

私はこの機会、岩手県の紫波町彦部地区の訪問に続き、2025年1月には、東北地方におけるもう一つの指定支援モデル村で特定振興村であった青森県西平内町への訪問もしてまいりましたが、改めて今後も米山梅吉初代理事長の遺志を継ぎ、三井報恩会設立100周年に向け、社会貢献活動を継続していきたいという気持ちを新たにしております。



2014年に建立された記念碑の前で

日本基督同胞教会

日本キリスト教団 市川三本松教会 牧師 外谷悦夫氏



日本基督同胞教会とはどういう教会であったのか。聖書普及員の方が伝道師、牧師になっていく教会とはどういうものなのか。教会に残されている40年誌、60年誌の小冊子をも、日本基督同胞教会史をも、組織や教職制度に関しては記載がなかった。あるとき、小田原十字町教会に「日本基督同胞教会条例 明治32年2月」と記された謄写版の条例があることがわかり、無理を言って送ってもらい、そこに教職制度の根幹が記されていることを知った。

COVIT-19の感染が少し弱まった2021年6月8日に第一回日本基督同胞教会史研究会を開催した。旧日本基督同胞教会に根を持つ教会に呼び掛け、それぞれの教会が保存している資料の確認を行った。今回、機関紙「同胞」の最初期について考察する機会を与えられ、読み解いていくこととなった。

機関紙「同胞」（以下「同胞」）は1907年（明治40年）に第一号を発行している。前述の豊澤教会が保存しているものは1918年（大正7年）5月31日発行の第108号から1933年（昭和8年）3月10日発行第275号までである。これ以降も発行されたのかは確認できていない。1926年（大正15年）11月1日第204号から1929年（昭和4年）5月1日第233号まで「同胞」の「伝道ページ」と題して発行されている。「同胞」は「同胞社」が発行元。1907年（明治40年）第一号から1923年（大正12年）4月15日第165号までは新山泰治牧師（日本橋教会）が「同胞」の主筆であり編集責任者であった。

1923年（大正12年）9月1日の関東大震災により日本

橋教会が焼失したため、「同胞」は1923年10月1日発行の第170号と12月10日発行の第171号は、大阪で印刷された。1924年2月10日発行第172号から滋賀県大津市膳所にて印刷されるようになり、矢部喜好牧師（膳所教会）が編集の責任を負われた。



機関誌「同胞」(大正7年第108号)

編集印刷の場所が東京日本橋教会から滋賀県大津市膳所教会に変更になったため「同胞」誌上の広告も東京のライオン、千代田香油・千代田ポマードから滋賀県大津の大工石倉善四郎、メンソレータムが中心となっていく。一番の変化は、誌面構成とその内容である。新山牧師が主筆であった時は、いわゆる新聞の体裁をとり、その時々のできごとについて主張を見ること

ができる。一面は論説に当たるもの。二面から説教、説苑(説の苑の意味であろう)、日曜学校、投稿欄、詩苑(詩、和歌、俳句)、教報(各教会報告)、年会案内と年会報告、個人消息、広告の8ページ立て。関東大震災後の「同胞」は機関紙の特徴である日本基督同胞教会の「広報」的側面が表に出てきている。後に論説が一面に記載されるように整えられ、別刷りの「伝道」や「伝道ページ」を加え、最終的には「はらから」と称する付録のページとなり、特色を出していく。

関東大震災を通し、「同胞」の紙面を見ていくときに登場する人々が変わっていく。日本基督同胞教会を牽引してきた第一世代ともいべき人々(中島錦五郎:除名、石黒猛次郎牧師:召天、新山泰治牧師:牧師をやめ東京の復興につくす、眞山義作牧師:隠退等々)が辞めて、第二世代ともいべき矢部喜好牧師、安田忠吉牧師、有賀鐵太郎らが登場してくる。その意味でも関東大震災が日本基督同胞教会に与えた影響は大きいと思われる。



関東大震災後のテントの教会
本所区緑町(現墨田区)日本基督同胞教会本所教会は震災により焼失後、アメリカの教会より援助寄贈されたもの

ここで今回取り扱う1918~1919年の機関紙「同胞」の時代背景を確認しておきたい。「同胞」は機関紙ではあるが、先述したようにメディアの一つとしてこの時代の事件、思想に取り組んでいるからである。1918年

1984年	日清戦争
1985年11月	基督同胞教会の伝道が日本において開始された
1899年	文部省より公認学校における宗教教育禁止の訓令
1901年	日本基督同胞教会第一回年会開催
1903年6月	内村鑑三「戦争廃止論」を「万朝報」に発表
1904年2月	日本基督教会 朝鮮伝道を開始
1907年5月	メソジスト3派合同総会開かれ、日本メソジスト教会成立。監督に本多庸一選出
1910年6月	世界宣教会議エディンバラで開催。本多庸一、井深梶之助、原田助、千葉勇五郎ら出席
1911年12月	日本基督教会同盟成立(会長本多庸一)
1914年	第一次世界大戦
1916年	アインシュタイン 一般相対性理論発表
1920年1月	国際連盟成立 10月賀川豊彦『死線を越えて』刊
1921年	中国共産党成立
1922年12月	ソビエト社会主義共和国連邦成立
1923年	関東大震災
1925年	治安維持法公布

~1924年は日本でいう「大正」時代の中期から後半にあたる。新神学の影響がある中、この期間は藩閥政治から政党政治への移行期であり、第一次世界大戦、共産主義、旧ソビエト政府府立、流行性感冒(スペイン風邪)の流行、不況、米騒動、朝鮮半島での3.1独立運動、関東大震災から復興、世界大恐慌、満州事変から

15年戦争に続く時代である。使用した年表は「日本キリスト教史年表」(日本キリスト教歴史大事典編集委員会1988年4月刊教文館)であり、必要に応じて日本基督同胞教会関係等を加えた。

さて、「成年に達せんとする教会」となった日本基督同胞教会の最初の歩みはどうであったのであろうか。1895年11月、アメリカから次の3人が帰ってきた。中島錦五郎。彼をアメリカ基督同胞教会は宣教師として日本伝道の一切を託した。土井操吉は中島の勧めで日本伝道に協力することにした。米山梅吉はアメリカにおける中島の友人で彼と共に宣教師として派遣されたが、後実業界に転じた。中島はまず京都に赴いて同胞教会日本伝道の全般的計画を立てた。土井操吉は東京京橋区樋町一番地に借家をかりて伝道を始め「基督同胞第一教会」(東京第一教会)が設立された(1895年冬)。そして京橋区惣十郎町に移転。熱心な伝道により教勢は次第にあがった。桜井女塾の塾生が参加した。桜井女塾は桜井昭恵と伴侶桜井チカ子の経営する塾であった。桜井はもともと日本基督教会の牧師であったが、この時は牧師を退いていた。チカ子はアメリカ留学中に同胞教会の監督ベルの家に寄居して、その一家の信仰的な生活、あたたかいもてなし、平民的な態度に深く感化され、つとに夫妻ともに同胞教会に好意を寄せていたので、塾生をこの教会に出席するようすすめた。土井の後、桜井の紹介で日本組合教会に属していた武田頼夫が、同じく桜井の紹介で福井永瀬があとを継いだ。中島錦五郎に関する不幸な事件のため不振に陥り、福井辞任後、解散のやむなきに至った。第二教会(駒井沢教会)は滋賀県草津町の近在駒井沢村に設立された(1896年11月12日)。これはアメリカに留学していた駒井富江が帰国の途、サンフランシスコのホテルで中島錦五郎、土井操吉に出会い、日本に対する伝道の志において互いに共鳴することがあったためである。1895年11月帰国した駒井富江と父親の駒井昇策は心を合わせ郷里の

救いのために祈った。この時既に組合教会によって駒井村に伝道が行われていたが、手のおよばないところもあり、同胞教会がそれを引き継ぐことになった。この教会は草津に講義所を開設し、働きの重点が草津に移るようになったため、駒井沢の第二教会も自然消滅するに至った。この第一教会の解散、第二教会消滅も中島錦五郎に関する事件が絡んでいたという。

では、彼に関する事件及び第三回年会記録が記す不品行とは何であろうか。そのことを扱う前に、彼がアメリカから派遣されたいきさつと彼の活動について見ていきたい。

先ず名前であるが、中島錦五郎(旧姓入江)と日本キリスト教歴史大事典(1988年8月刊 教文館)は記載し、日本基督同胞教会史と日本基督同胞教会年会記録は中島錦五郎と記している。ところが草津教会「百周年によせて」は入江錦五郎(元、中島)と記している。アメリカの「キリスト同胞教会史1897」はGeorge Kirieと伝えている。日本基督同胞教会史(1963年7ページ)によれば、彼は1885年東京築地のメソジスト教会で受洗し、アメリカ留学中に同胞教会に転じ、デイトン第一回同胞教会に属した。ウィーバー監督から按手礼を受けている。アメリカ側はこのことをどのように伝えているだろうか。「キリスト同胞教会史1897」の記述をみてみよう。そのころ、アメリカの同胞教会は既にアフリカ、ドイツと宣教師を送り、新たな宣教地として中国か日本を選ぼうと検討していた。採決の結果、満場一致で日本に決まった。中国か日本かを考え決断しようとしている間に主はご計画を持って新しい地に最初に足を踏み入れる人を備えられた。その第一はGeorge Kirieであった。数年アメリカに滞在し、大学院で学びも続けていた。日本生まれの日本人で優れた聡明さを持ち目的を達成しようとしていた。彼は日本において社会的地位のある人であった。日本の宣教を開拓していく上での管理者に任命された。Dr.Irieがデイトンに居た時に一緒にいたU.Yoneyama(米山梅吉)は前途有望な若者であり、彼

を助ける役割を委任されていた。

Dr.Irieは1896年10月13日付けの日本宣教のベル監督への手紙に宣教計画と今後の働きを見込み、牧師任命を報告している。Irieの報告を見ると、宣教本部に相談することもなく、日本において自由に牧師を求め、宣教地を決めていくことができたのはどうしてなのか。日本人による宣教を目指したといわれ、そこに同胞教会らしさを見る向きもある。しかし、アメリカ同胞教会の宣教委員会の重要な機構改革があったことが記されている。それは1893年のアメリカ同胞教会の総会で決定された。宣教地の年会が、総会によって選ばれた人以外の人物を加えることを許可するというものであった。しかも、年会よりも上位の委員会と年会は同等の権利を持つことが定められた。これによりIrieは報告をアメリカのベル監督にするものの、自由に人と宣教地を選択することが可能であった。なお、機構改革の理由は記されていない。

中島が描いた宣教のスケッチは、実際どのように展開したのか。その過程でどんなことが起きたのか。日本基督同胞教会史の記述と合わせてみて行こう。

東京第一教会、土井操吉が予定通り第二教会に移ったがM.Okamotoが召されたため、武田頼夫が就任した(元組合教会牧師)。一年後、小田原に転任。後任は福井永瀬。しかし中島に関する事件故に教勢不振になり福井辞任(1899年11月と思われる)し、東京第一教会は解散。

第二教会は前述した通り。中島に関する事件故に土井操吉辞任。

三嶋教会 1897年5月田代信次が静岡県三嶋町小中島に伝道を開始したが、その年の10月田代が永眠。後任を得ないまま閉鎖。三嶋町は現在の三島市。すぐ北の長泉町に米山梅吉が養子に入った米山家がある。

沼津教会 1897年5月岡田久次郎が伝道開始。1913年沼津大火のため会堂が焼失。翌年八幡町に移転。

後に香貫町に移転。15年戦争のため会堂焼失。福音教会系の教会と合同沼津岳南教会となる。

静岡教会 1897年6月二番町において伝道が開始され、最初に派遣されたのは菊地平角であった。菊地は熱心な伝道が続けたが1900年に永眠。その後、和田肇が就任し、鷹匠町一丁目に移転し、さらに一番町に移った。15年戦争の末期アメリカの空襲で焼失。当時の寺尾牧師の召集不在中、ご家族ご伴侶お子さん達全員爆死された。渡辺晋がシベリアの収容所生活から帰還し、新会堂の建設、保育園の開設と発展。現在の静岡一番町教会である。

中島錦五郎がスケッチした静岡の2教会が現在も活発に伝道している。大津にも後に教会ができていく。そこまで中島の見通しがあった事を物語っている。一方で、中島が一切を任された1895年から除名される1903年までに12の教会が成立し、そのうち5教会が消滅している。

1895年の宣教師派遣から6年後の1901年第一回年会が開催された。その記録に、日本メソジスト教会との合同問題が議題に上がり、合同に対して「一般の感情は好意を有せり」とある。その後、この話は進展が難しかったようで、1915年第13回年会でも美晋教会との合同が話し合われている。最初期の混迷が長く尾を引いている現実を見ると、事業し易い方向へと向かっていたようだが、本国のアメリカ同胞教会がそれを了としなかったためであろうか合同はしなかった。土肥昭夫は次のように語っている。「日本のキリスト教は、資本主義の発達にともない、都市中産階級、知識人層の中にその活路を見出し、その教勢はゆるやかに上昇していった。諸教派とその連合体は、それぞれ形態を整え、ミッションより独立するにせよ、協調するにせよ、経済的基盤を確保する努力を積み重ねつつ、組織的伝道を展開していった」と述べている。いずれにせよ、日本の基督同胞教会は自らを鼓舞しアイデンティティを示し新たに進もうとしている。

米山梅吉翁の 一万円札に馳せる想い

大分RC 2024-2025年度 青少年奉仕委員長
三井住友信託銀行 大分支店長

荻原 哲氏



荻原 哲氏(社外講義風景)

2025年3月30日(日)、大分駅前前の祝祭の広場にて、第2720地区大分第4地区ロータリークラブ共催イベント「子どもお仕事体験!なりたいたい自分を探そう!わくわく広場」が開催されます。小学生に14種の職業体験、消防車両や高所作業車などの働く車、高校生によるパフォーマンスを楽しんでもらうイベントです。

わが大分ロータリークラブからは「パティシエ体験(ホテル日航大分)」「高所作業車体験(九州電力グループ)」「ロータリー銀行(日本銀行・大分信用金庫・三井住友信託銀行)」「ぶんぶん号乗車体験(JRおおいたシティ)」が出演します。



チラシ完成版

「ロータリー銀行」では、日本銀行安徳大分支店長、大分信用金庫木村理事長にもお力添えを頂き、10^キを持ち上げる「1億円体験」と、練習用紙幣を使用する「札勘体験」を行ない、参加者に記念に練習用お札を持ち帰ってもらいます。

三井住友信託銀行大分支店では、毎年、夏休み親子スクールを開催し、地域の小学生に楽しみながら銀行やお金について学んでいただく機会を提供しています。いつもは銀行員が練習用に使用している模擬紙幣を使いますが、今回は、ロータリー銀行専用の模擬紙幣を用意しました。ロータリー銀行の一万札の肖像

は勿論、我が国のロータリーの父、米山梅吉翁です。お札の裏面には、建設当時の三井本館と三島から見た富士山をデザインし、ロータリーの父、信託の父であるなどの功績を記載しました。一人でも多くの子どもたちに米山梅吉翁の奉仕の信念、三島から東京、東京から世界に学び、我が国の経済・金融のみならず、学術、文化、医療、農業に至るまで幅広いフィールドに力を注いだその生涯を知ってもらい、これからの時代を強く生き抜く糧にしてほしいという想いを込めています。

■米山梅吉さんとのご縁

小学生の頃、鎌倉の生家には夏休みになると東京から遠戚の子が毎年、海水浴に遊びに来ました。私よりも5-6歳下の仁君、元君という聡明なご兄弟で、その



イベントの実行委員会風景

お母様、彌富まき子さんが米山梅吉さんの長女愛子さんの孫にあたります。私が1993年に三井信託銀行に入社することが決まったころ、入社する会社の初代社長が米山梅吉さんだと教えてもらい、初めて存在を知りました。

玄孫の仁さんは、現在、法政大学理工学部の教授として応用情報工学の教鞭をとられ、元さんは三菱UFJ銀行でご活躍されています。

■ロータリーとの出会い

コロナ禍の前、3年間在籍した日本橋営業部では、小鷹一志部長(現・三井住友トラスト保証社長)が、お客様向けに三井本館の見学会を開催し、堅牢な三井本館の建造や米山梅吉初代社長の功績について大変熱心に語っていました。私も何度かお客様をご案内する役目を頂戴し、小田原ロータリークラブの皆様をご案内したこともあります。

一昨年(2021)の10月、大分ロータリークラブに加入しました。不良債権処理で経営環境が厳しい時代に先輩支店長が悔しい想いで退会してから22年。小職は52歳、米山梅吉さんが日本で最初のロータリークラブを設立した時の年齢でした。ロータリークラブの卓話の準備で書籍と年表を読み進めるうちに、梅吉さんは何歳の時に、何をされたのかが気になり、見ていく中で、気が付いた幾つかを申し述べます。

●慶応(江戸時代)生まれ

梅吉さんは、明治元年生まれと表記されることが多いですが、お生まれは1868年2月4日ですから元号は慶応4年。9月8日に明治に改元された年で、4つの時代を生き抜いたことが分かります。

●武士の子として出生

梅吉さんは、大和国高取藩(奈良県高取町)の藩主、上村家の家臣であった父、和田竹造と三島大社の神官の娘である母うたの三男として江戸の藩屋敷で生まれましたが、4歳の時、父親が他界し、母方の三島に移住しました。

●学に対する強い欲求と行動力

俊敏・明朗・快活な少年で、旧幕府の沼津兵学校の流れを汲み優秀な先生方がおられた沼津中学校に進み、大変、学業優秀だったそうです。しかし、沼津では学ぶべきことを学んだので、東京で石に噛り付いてでも勉強し立身出世したい、という強い思いから、15歳で家族に告げずに家を出ます。汽車が新橋-横浜間しか無い時代、3日間、100^キ近くを歩いて上京しました。どんな想いで冬の夜空を見上げていたのでしょうか。

東京では中学校の先輩や親戚筋を頼りにし、経済的には苦しかったようです。17歳で東京府の職員試験に合格し、仕事をしながら東京英和学校(今の青山学院)や米国人から語学を学びました。

19歳の時、米山家の養子になりました。米山家の養

子になることは、梅吉さんが11歳の頃、既に家族の間で決まっていたようです。その年の年末に単身、サンフランシスコに渡り、そこから27歳で帰国するまで、米国カリフォルニア州、オハイオ州、ニューヨーク州で学びました。学費と生活費を稼ぎながらでしたから、8年もの時間が必要だったのだと思われます。

●結婚・就職

養子入りの当時、米山家には12歳の一人娘の「はる」さんがおり、養子入りの時点で結婚することが決まっていたようです。帰国後、高等科を卒業したはるさんと結婚。当初、新聞記者を目指し就職活動をしたものの募集が無く、英語が話せる人材を求めている日本鉄道会社に入社。翌年、長女愛子さんが生まれ高処遇を求めていたところ、旧友の伝もあって三井銀行に入行します。

●破竹の出世街道

そこからは破竹の出世街道を歩みます。その頃の様子について書籍には次の表現で記載されています。

「大御所の口利き、アメリカの大学卒、演説は上手、英語は自在、男前と全てが揃っていた」

大御所とは、勝海舟や井上馨との関係を意味していると思われます。

入行して僅か1年後、31歳で神戸支店の次席へ。この間、「大御所」から、大臣秘書をやらないか、と声が掛かったこともあったようですが丁重に断りました。同じころ、三井銀行若手3名による欧州研修メンバーに抜擢され欧米の銀行を回り実務を学び帰国しました。これが、三井だけでなく、多くの銀行の組織、店舗、社内規定類の礎になっているそうです。後に日銀総裁となる井上準之助が欧米視察をした少し後の時期と記録に残っています。

34歳で大津支店長を皮切りに、深川、横浜、大阪の支店長を歴任し41歳で常務となりました。その後は、東京に居を構えます。

●新隠居論執筆

46歳の時に「新隠居論」を執筆し、報恩の趣旨を明らかにします。つまり、後進に道を譲り社会公衆の為に奉仕すること、社会の為に尽くすことが必要だと言っています。

その後も外遊や執筆活動、青山学院の拡張等、社外の活動にも精を出し、52歳の時、東京ロータリークラ

ブを設立し会長となりました。

●二人の子供に先立たれる

銀行での出世、外遊を伴う財界活動、ロータリーをはじめとする社会事業など、仕事は順風を極めていた梅吉さんでしたが、ロータリークラブ設立の翌年、53歳の時に長男東一郎さんが二十歳の若さで逝去、58歳の時に次男の駿二さんに二十一歳で先立たれます。この間に義父、長兄、次兄の逝去等、家族の死を目の当たりにしています。

長男の喪が明け、後に三井信託の初代会長となる三井合名理事長團琢磨を団長とする米英訪問日本実業団に参加、フランクリン・ルーズベルト大統領と会見など3カ月の視察を経て帰国。55歳で三井銀行常務を辞し三井信託の設立に奔走します。設立時の取締役には三井合名・三井銀行の役員だけでなく、他の財閥の保険会社、銀行、事業会社の役員が連なるなど、三井だけの事業とせず全財界の支持・協力を得てスタートさせたいと意図していた梅吉翁の意思が垣間見えます。

●信託の父

56歳の1924年3月、三井信託株式会社を設立し、社長に就任。震災復興にも奔走したと聞きます。68歳で三井信託会長および信託協会会長を辞任するまで各種団体の理事・評議員、執筆活動に加え、ロータリー世界大会、日本赤十字、三井報恩会等、社会活動を拡げていきます。69歳の年で現在の青山学院初等部の前身、緑岡小学校を設立し校長に就任。70歳で貴族院議員も務めました。

この頃から、体調を崩し入院するケースも増えたようですが、三井報恩会の理事長として全国の療養施設を精力的に回り、ハンセン病、癌、結核等の医療、農村振興事業や、文化・芸術事業に対する寄付や助成を行っています。

●戦渦、終戦、晩年

74歳の年に真珠湾攻撃、終戦の前年76歳で三島の別邸に疎開、終戦後9月に終戦の国会に登院しておられます。この頃は、前立腺肥大の病気が相当悪化していたようです。翌年3月に緑岡小学校を青山学院に移管し校長を辞任。同年4月に長泉の別邸にて78歳で最後を迎えられました。6歳年下のはる夫人は、9年後の1955年(昭和30年)に逝去されました。

■翁に馳せる想い

米山梅吉さんのパーソナルな部分に焦点を当て、米山梅吉さんの人生やお人柄について、自分自身の年齢と照らしながら、米山梅吉さんへの想いを巡らせてきました。

明治維新、大戦、震災等、激動の時代に、苦学、米留学、出世、そして我が国ロータリーの創設。二人の子息に先立たれるという悲しみの経験、米英視察団、信託の創設、小学校の創設、数々の社会貢献活動と続いていく訳ですが、その膨大な熱量にはただただ驚き、奉仕の信念に深い尊敬を覚えます。私は100年経った今、米山さんがつくった信託銀行の支店を任されていることに身の引き締まる思いであり、次の100年もロータリークラブと信託が奉仕の精神をもって発展できるよう、微力ながら力を尽くしていきたい。



高山活版社のお二人と模擬貨幣



■おわりに

練習用紙幣のデザインと印刷について、大分RC会員の高山活版社、高山龍五郎会長、高山香織取締役にご多大なご協力を頂戴しました。また、「わくわく広場」を熱い想いで力強く推進頂いた佐藤憲幸ガバナー補佐と事務局を一手に引き受けられた寺崎直史さん(大分城西RC)をはじめ、運営委員の皆さんにこの場をお借りして御礼を申し上げます

米山梅吉翁生誕地に 紅白梅を記念植樹(献樹)

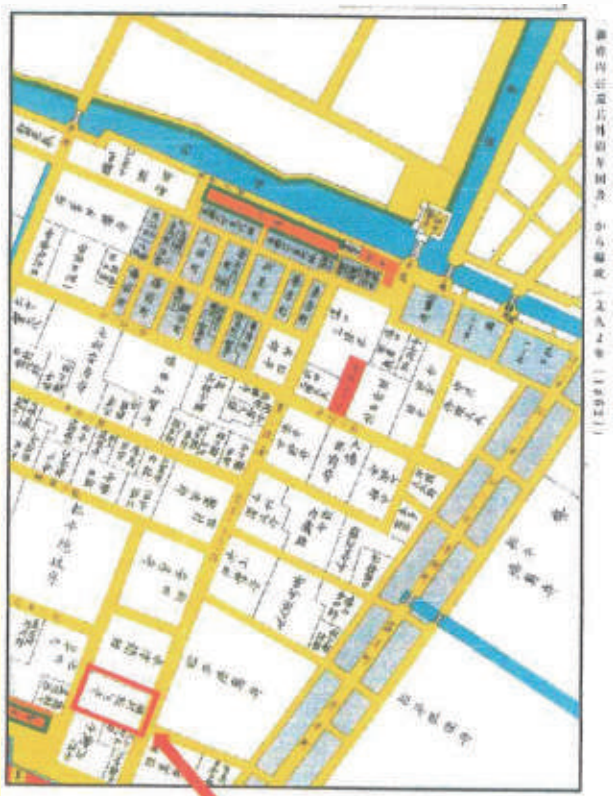
東京芝ロータリークラブ

令和7年2月4日、東京芝ロータリークラブ(所在地:東京都港区虎ノ門3-18-12,2024-2025年度会長:岡田佑)は、日本におけるロータリークラブ創始者で、ロータリー運動の発展に多大な貢献をした米山梅吉翁の生誕を記念して、東京都港区の芝東照宮境内に翁を顕彰する銘板を設置し、紅白の梅の木を植樹(献樹)する式典を執り行いました。この植樹活動は、米山梅吉翁の業績とその精神を次世代に伝える貴重な機会となります。一方で、当クラブでは入会3年未満の若手会員(青芝会)を中心に、毎年米山梅吉記念館を訪れており、その関係で同記念館からの要望や、さらには全国のロータリアンの旧来からの要望にも応え、その役割を果たすものであります。

米山梅吉翁は、日本におけるロータリー運動の先駆者として広く知られ、1920年に日本で初めてロータリークラブ(東京ロータリークラブ)を設立されました。翁の信念は、ロータリー運動の精神をもって地域社会へ奉

仕し、世界平和の実現に向けた活動を行うことでした。その理念は、現在も日本中のロータリークラブに受け継がれ、米山梅吉記念館を訪れる多くの人々にも感動と啓発を与え続けています。

本式典が開催された芝公園の一角にある芝・東照宮は、元来増上寺内の社殿でした。徳川家康が慶長6年(1601年)に還暦を迎えた記念に自らの像を刻ませた「寿像」を、自身が駿府城に於いて祭祀していました。元和2年(1616年)家康は死去に際して「寿像」を祭祀する社殿を増上寺に建造するよう遺言しました。この社殿は家康の法名「安国院殿徳蓮社崇誉道和大居士」より「安国殿」と呼ばれました。明治初期に神仏分離令により、増上寺から切り離されて芝東照宮となりました。これが芝東照宮の起源です。そんな芝東照宮は、米山翁の生誕地である芝田村町に近く、歴史と文化が息づく場所であります。そして、徳川家と深い



大和国高取の屋敷があったと思われる場所
(増補港区近代沿革図集より)



米山梅吉生誕の地

芝東照宮

世繫がりのある家系に生まれた米山梅吉翁の意志を後に伝えるためにふさわしい場所です。



芝東照宮境内

また今回の献樹活動は、この地を名付けられ兼務されている芝大神宮の勝田博之宮司(当クラブ会員)のご理解とご協力を頂き、米山翁の生誕を記念するだけでなく、日本全国のロータリアンの聖地として、その功績を深く理解し、米山翁が残した足跡を辿り、奉仕の精神を現代に生かすための重要な場所であり続けることを願っております。やがて植樹された梅の木が成長し、数年後に迎える生誕160周年に向けて花を咲かせ実を結ぶように、米山翁の奉仕の理想が今後益々多くの人々に伝わり、地域の発展と、日本と世界の平和への貢献が果たされることを期待しています。

<東京都港区芝地区、並びに芝田村町について>

当東京芝ロータリークラブが所在する芝エリアは、東京都心に位置し、日本でも有数のビジネス街として知られています。周辺には、新橋や虎ノ門といった有名なビジネス街があり、オフィスビルが立ち並ぶ光景はまさに都会ならではの風景です。その一方で、広々とした芝公園や由緒ある高級住宅街も残っており、バランスの取

れたエリアとなっています。周辺環境や交通網の整備が進み、驚くほど便利な場所である芝エリアは、ビジネスの拠点として非常に有利な地域と言えるでしょう。

芝、麻布、赤坂、高輪、芝浦・港南の5つのエリアに分かれる港区の中でも芝地区は、新橋や虎ノ門周辺にオフィスビルが多数建ち並ぶ、日本のビジネスの中心地の一つです。平日は、朝も夜もビジネスマンで賑わっています。しかし、この街がかつては漁業も行われていたことを知る人は少ないでしょう。元々「芝」は「志波」と表記されていました。志(こころざし)が波の如く押し寄せて白波が立つ程のすばらしい場所であったことから名づけられたと言われています。オフィス街から少し離れると、東京タワーや竹芝栈橋などの観光名所があり、多くの人々が訪れます。また、徳川家の菩提寺であり、国指定文化財の門を持つ増上寺のような由緒ある寺社も点在しており、芝エリアはさまざまな顔を持つ魅力的な場所です。今回梅の木を植樹(献樹)した芝東照宮も、その一つです。

芝田村町は、米山梅吉翁の生誕地として知られています。1873年(明治5年)に陸奥一ノ関常陸谷田部藩邸跡と幕臣邸跡の地が芝田村町と名付けられました。町名は、「田村小路」という道名に由来しています。「田村小路」とは、現在の西新橋二丁目、新橋三丁目、また西新橋二丁目と新橋四丁目の間を東西に走る通りのことで、この小路の東西に田村右京太夫(田村宗良)の屋敷があったため、こう呼ばれました。

芝東照宮は江戸時代から地域の人々に信仰されていた重要な神社であり、その近隣にあたる芝田村町は、米山梅吉翁の生誕の地であり、深い関わりがあります。そのため、今回の記念植樹(献樹)地として芝東照宮が選ばれました。



米山梅吉翁を顕彰する銘板



鮎壺の滝



高さ約9m幅約65m、富士溶岩流の岸壁に形成された「鮎壺の滝」。滝壺が藍のように青いことから「藍壺の滝」、遥かにのぞむ富士山が絶景であることから「富士見の滝」とも呼ばれます。平成8年には天然記念物として静岡県の指定を受け、平成25年には富士山の世界文化遺産登録にちなんでジオサイトとしても登録されました。黒澤明監督の「七人の侍」など映画のロケ地にもなりました。

米山は自身の雅号の一つに「藍壺」を使っていました。幼い頃遊んだ滝。東京での多忙な生活から離れて

過ごす長泉・下土狩の米山別邸からも近いこの滝に愛着を持っていたのでしょう。現在、踏切や信号機にも「藍壺」「鮎壺」と表記され、地元の人には馴染みの場所です。

令和7年3月、この鮎壺の滝に隣接する土地が整備され鮎壺公園としてオープンしました。散策路として鮎壺の滝を眺望する展望デッキや芝生広場などがあり、大型バスの駐車場も完備しています。

記念館への訪問の際、足を伸ばしてみたいでしょうか。

お知らせ

米山梅吉記念館 春季例祭

[日時] 2025年4月19日(土) 14時
例祭 講演

[場所] 米山梅吉記念館ホール

講演

演題
三井報恩会創立90周年:
初代理事長米山梅吉翁の足跡を訪ねて
岩手県紫波町(彦部地区)、青森県平内町訪問

講師
三井不動産株式会社
総務部 総務グループ グループ長
金井潤氏



懇親会

ロビーにて講師を囲んでの懇親会。多くの皆様のご参加をお待ちしております。



米山梅吉記念館のチャンネル開設しました
ご視聴・ご登録、よろしくお願いいたします



米山梅吉記念館のご案内

新幹線三島駅よりタクシー5分
東名沼津ICより15分

[開館時間] 午前10時～午後4時

[休館日] ●月曜日 ●12月28日～1月4日

●整理のための休館日(5月・8月の特定日)

米山梅吉記念館 館報 Vol.45 春号

■発行日/令和7年3月20日 ■発行者/公益財団法人 米山梅吉記念館 理事長 松村 友吉

〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1

TEL(055)986-2946 FAX(055)989-5101 E-mail yumh@ai.tnc.ne.jp

米山梅吉記念館
公式ホームページ
<https://yoneyama-umekichi.jp>

